人権ほっと29年10月号

直感力が欠如する社会

大阪教育大学教授
堀　薫夫

ある日の午前八時半東京大手町付近。颯爽としたスーツ姿のビジネスマンらが通勤している。同日午前十時前、東京上野駅近く。ラフな格好の若者が道端でたむろしている。パチンコの開店前の列であった。多くの人は前者を敬し後者を蔑むかもしれない。しかし見方を変えれば、後者がまともで前者が問題だということもできる。

今日、大企業や官庁の不祥事を多く耳にする。東芝の7千億円以上の損失問題に、日本郵政の4千億円損失問題、シャープの経営破たん、日本航空の再建問題、古くは住専問題にメガバンクへの公的資金投入問題など、大企業が巨額の損失をかかえても公的資金という税金投入による解決策が示されることが多い。しかしギャンブルにてお金を磨った者は自業自得だとされる。

二〇一三年には高野山金剛峰寺で十五億円の資産運用損失事件があった。証券会社から特別な儲け話が来たとき、高僧には、自分たちは苦行を乗り越えた特別な存在だという自負があった。証券会社の人間はそこをくすぐることで簡単に騙せたと言っていた。

内田樹は著書（『直感はわりと正しい』）のなかで次のように言っている。「どうふるまってよいか適否の規準がないときに、適切にふるまう」直感的判断力。「この人は信用できるかできないか」を瞬時に判断する力。現代社会の「秀才」と呼ばれる人たちからこうした力が弱まってきている。

社会の「エリート」と目される人たちが犯す多大な社会的損失問題。その背後には、マニュアルとパソコンに支配され、ごくふつうの市民の生活に根ざした直感力が欠如した点があるのではなかろうか。しかしそうした人たちは、パチンコ店の前にいた若者たちとは対照的に、外見的には颯爽としているのかもしれない。